慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』(第四十一～四十五章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres XLI–XLV) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.65 (2017. 10) ,p.110(13)- 122(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20171031-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』

（第四十一～四十五章）（翻訳）

山本武男

これまでのあらすじ

人の命の儚さ。経済評論家としてパリに暮らし、積極的に有力者の間に顔を出しつつ、着実に自身の理想像に近付きつつあったアンリ・モプラン。富豪ブルジョ氏の妻の愛人となったのは、その家庭に入り込み、その家の娘との婚姻を実現し、資産を手に入れることを意図した策謀からだった。ブルジョ氏が娘婿には貴族の苗字を所有していることを望んでいた為、政界の人脈を用い、アンリはそのことにも成功した。が、家系が途絶えと考え、苗字を拝借した貴族の末裔が生きており、アンリと決闘することとなる。そして銃の腕には自信があったアンリも、思いも寄らない展開の中で敗れ去る。生と死の境は紙一重！　近く行われる予定のアンリの結婚式の話で沸き返っていたパリ近郊に暮らすモプラン家の陽気な日々は暗転、深い悲しみに覆われる。そんな中、次女ルネの様子に、ただならぬ気配が漂い始める。物語ではこれから、

ルネが兄の決闘とどう関わっていたのかが徐々に明らかとなる。十九世紀半ばのフランスのブルジョワ核家族の生態を描き、明治の文豪田山花袋も愛したゴンクール兄弟の代表作の一つにして、問題作である。

〔翻訳〕

四十一

ドノワゼルは毎日、ラ・ブリッシュにルネの健康状態を訊きに来た。少々持ち直した時にも、ルネが会いたがらないのは、ドノワゼルには驚きだった。この娘が病床に就いた折には、自分は家族の一員ほどの扱いを受ける一友人として彼女に迎え入れられるのを常としていたのではなかったか？　おまけにこの娘が病気になったときにはいつも、自分はこの娘から真っ先に呼び出され、迎え入れられる者の一人であり、彼女の太鼓持ちとなり、回復期を陽気なものにし、健康時の笑いを取り戻させる役回りの道化師に徹していたのではなかったか？　彼はむくれはしたものの、なお懲りずに出向いていった。しかしルネの部屋はドノワゼルに対し、閉ざされた儘であった。

ある日には、疲れが酷くて面会できないほどだと言われ、別の日には、ブランポワ神父と会談中だと言われた。一週間が過ぎて、漸くドノワゼルは迎え入れられたのである。

彼は、愛する人々との再会を通して元気を取り戻す病人たち特有の生き生きとした心の動きや心情の吐露をル

ネに期待していた。自分の方も喜びで彼女の首っ玉にしがみついてしまうのではないかと思っていたのである。

ルネはドノワゼルに握手を求めたが、指まできちっと握り締めず、誰に対してでも通用する通り一遍の言葉で彼と会話をし、十五分すると恰も眠気が襲ってきたかのように、目を閉じてしまった。

全く理解できないこの冷淡さに、ドノワゼルは苦々しく苛立った。自分の愛情の中でも最も古くからあり、一番純粋で率直なものに於いて、辱めを受け、傷つけられた様に感じた。彼はルネが自分に対して何か反感を抱く原因があるかどうか探ってみた。バルースが自分についての批判をこの娘に押し付けたのか？　ルネは自分の兄の死をその決闘の証人の所為にしているのか？　というのも、証人の友人の一人でカンヌにヨットを持っている男が地中海を一周しようと提案してきたので、ドノワゼルは誘われるままに付いて行ったことがあったからである。

ルネの方はといえば、ドノワゼルを前にして恐れを抱いていたのだった。彼女には、彼の前で起した発作の発端、転倒と神経障害に先立つ瞬間ばかりが思い出されてくるのだった。兄の血が自分を息詰まらせ、叫び声のようなものが唇にまでのぼってくるのを感じたあの瞬間ばかりが。何か喋ってしまったかしら？　無意識のうちに秘密を漏らしたのではないかしら？　アンリを殺したのは自分であり、あの新聞を送り付けたのも自分だとドノワゼルに言ってしまったのではないか？　自分の罪はその胸のうちから外に出てしまったのではないのか？……ドノワゼルが入ってきたとき、ルネは彼が全てを知っているのだと思い込んだ。彼をすぐ支配した気まずさは彼女から伝播したものであり、彼女が冷淡に対応した結果、彼も冷淡さを示したのであったが、それらドノワゼルの態度すべてがルネの考えている事、即ち自分はもう罪を喋ってしまったので、そこにいる彼こそ彼女に裁きを与える者だという思い込みを強めさせる結果になってしまったのであった。それゆえドノワゼルの訪問の最中、母親がちょっとその場を外そうとすると、ルネは恐怖に満ちた身振りで取り縋ったほどだったのである。

こんな考えが浮かんだ。彼に、この出来事は運命的なものであった、あの新聞を送り付けることで自分は相手から苦情を引き出し、兄があの名を名乗るのを邪魔し、兄の結婚話をだめにしたかっただけなのだと言って、自己弁護できるだろう、しかしそうすると、なぜ自分はそれらの事を望んだのか、なぜ自分は兄の富や未来を破壊するのを望んだのか、それら全てに就いて告白しなくてはならない……こんなふうに、しかも普段、最も高く買っている男の眼前で自己弁護する自分を考えただけで、恐ろしくなり、嫌悪感を抱いた。自分が殺してしまった人に対し、記憶を封印し、自らの死によって沈黙を守ることで報いるのに越した事はない！

ドノワゼルが帰ったのを知って、彼女はほっとしたが、それは己れの秘密が自分ひとりのものになったと感じられたからであった。

四十二

ルネは持ち直した。二三ヵ月後には、彼女は恢復したかに見えていた。外面はすっかり健康を取り戻していたのである。彼女は苦しむこともなくなった。諸器官に変調を来たさせ、先ごろ命も危ぶまれ兼ねないところまでいかせる原因となった苦痛が残したあの不安な気持ちさえ、もはや感じていなかった。が突然、病気がぶり返す。階段を昇るときには、呼吸が非常に速くなって息が切れた。再び動悸が始まり、しかもより頻繁に、より激しくなる。それからまた全てが止んだりもし、それは病気の方が静止し、ときどき病人のことを忘れてしまっているかの様に見えるあの状態に似ていた。

二三週間して、ルネの治療に当っていたサン＝ドニの医者はモプラン氏を隅に連れて行ってから告げた。「ひとつ心配な事があるのですが……あなたのお嬢さまのご容態は、わたくしにはどうもはっきりしないのです……

この種の疾患を特に専門にしている医者の助言を得たいと考えています……この手の心臓の病気は時々、際立って潜行する経過が見られますもので……」

「そうですね、この手の心臓病は……あなたの言う通りでしょう……」とモプラン氏は口籠った。

彼の言えるのはそれだけだった。彼の医学に関する古い概念、当時の学会の絶望的な学説、コルヴィザール、心臓病に就いての彼の著書のラテン語の題辞（エピグラフ）「煉瓦に死を齎す葦が寄り沿う」等々が唐突にはっきりと心に浮かんだ。昔の恐怖に満ちた書物の頁が眼前に髣髴とした。

「何てことでしょう！」医者がまた話し出した。「この病気の非常に危険なところは、常に潜伏期間が長い、と云うことです……わたくしたちが呼び出されて診察するときには、しばしば相当病気が進行しているものなのです……幾つかの前駆症状の所為で却って病気自体が認識されないことがあるのです……あなたのお嬢さまの場合は、幼少の時分からすでに、そしてそれからずっと感受性が強いお子さんだったのではないでしょうか？……少し批判されただけでさめざめと泣いたり、何でもない事で顔が上気したり……それからすぐ動悸が続いてなかなか終らない……何かに付けて動揺する……非常に才気煥発だが……ほとんど震えるように怒り、いつも何かしら少し気持ちの高ぶった感じではありませんでしたか？　彼女は全てに対して、友人関係や遊びや反感に対して情熱を傾けたのではありませんか？……そうなんです、そうなんですよ、この臓器が極だった働きをし、心臓肥大の不幸な疾病素質を持つお子さんたちは皆、まさに今挙げた様な兆候がおありなのです。仰ってください、あなたの知る範囲で、先ごろ、彼女に激しい心の動揺や、大きな悲しみといったものは何もありませんでしたか？」

「あります……ああ！　ありますとも……あの子の兄の死です……」

「彼女の兄の死……それですよ、恐らく」医者は、聞いた内容には然して重要性を認めない様子で言った。「ですが、あなたにお訊ねしたいのですが……例えば、もしや、失恋、といった様なことは御座いませんか？」

「あの子に？　ですか」

モプラン氏は肩をすくめてみせた。

「失恋！　ああ！　そんな事がありましょうか！」そう言って半ば合掌しかけて、目は天を仰いでいた。

「まあですね」医者が言った。「念の為、これらの事をお訊ねした次第なのでして。こういう場合、突発的な出来事は、とりわけ病を芽吹かせ、病気の進行を促進するものなのです。情熱に関わる問題は身体に影響を及ぼし心臓に作用する、とまあ、理論上はそうでして……二十年前、説が改まって以来、そう主張され続けてきております……わたくしからも、正当性があると申し上げられますが……怒りの発作や精神的な大きな痛手が心臓に負担を齎すという説なのですがね……」

モプラン氏は話を途切らせて言った。「それなら……それでは専門医の診察をお願いしたいのですが……それが望ましいでしょう……そうじゃ御座いませんか？」

「そうでうね、モプランさん、それが良いに決っております……そのほうが、誰にとっても安心でしょう、あなたにとってと同様わたくしにとっても……決った訳ではありませんが……ブイアールさんにお願いしようと思います。彼が最も評判が良いので……」

「ブイアールさん」モプラン氏は同意する仕草をして機械的に繰り返した。

四十三

昼の十二時を五分過ぎたところだった。

ルネの寝台の傍に坐ったモプラン氏は自らの両の手の中に娘のそれを取っていた。ルネは振り子時計を見詰め

ていた。「そろそろ来る頃だな」とモプラン氏が言った。彼女は、瞼をゆっくりと閉じることで彼に返事をしたが、静まり返った部屋のなかでは、夜中の様に、病人の呼吸と胸の鼓動が懐中時計の音とともに聞こえていた。

はっきりと響き渡る、有無を言わさぬ感じの呼び鈴の音が一度鳴った。モプラン氏は、体の中で呼び鈴を押されたかの様に感じた。体に震えが走り、針で一突きされる様な感じで指先にまで達した。彼は戸の方へ赴いた。

「旦那、家を間違えて訪ねてきた人でした。」と召使が言った。

「暑いね」坐り直しながらモプラン氏は娘に言った。彼は顔面蒼白だった。

五分後、召使がノックした。医者は客間で待っていた。

「ああ！」とモプラン氏は声を漏らした。

「ね、行って」娘が父に言ったが、また「パパ！」と叫んで呼び戻した。彼は戻った。

「あのひと、あたしを診察しに来たの？」恐れをなした様子でルネが訊ねた。

「いや……分らない……そんな事ないんじゃないか……多分、そこまでしないだろう」ドアのノブに手を当てながらモプラン氏が言った。

モプラン氏は行って医師を招き入れ、娘と引き合わせて自分は出た。

モプラン氏は客室で待っていた。

彼は歩いたり、坐ったりした。機械的に床の絨毯の上に描かれた花を見詰めた。窓際に行けば、指先で硝子をトントンと敲いたりした。

彼の中でも、周囲でも全てが停止してしまっているかの様であった。そこに、一時間いたのか、それとも一瞬いただけだったのか？　モプラン氏には見当が付かなかった。時が長さも尺度も失ってしまう人生に何度かある

瞬間の一つに彼はいた。自分の全存在が心臓の速い脈拍となってしまったみたいに感じた。全人生の心の動揺が、永遠に繋がっている極短い時間に集約された様であった。

夢の中で、何処からか落ち、そのまま苦しさを伴って落ち続けるときの様な眩暈を彼は感じた。纏まらない考え、混乱した不安感、ぼんやりとした恐怖心などが次から次へと空の胃袋から立ち上って来る感じで、こめかみが唸るように感じた。昨日、今日、明日、医者、娘、病、それら全てのことどもが彼の頭の中で渦巻き、体内で沸騰し、不快、不安、恐怖、臆病等の身体に変調を来す気分に混ざりあった。そして突然、はっきりした考えが彼に浮かんだ。この手の時間に、魂をよぎるあの定まった意識である。部屋には医師がおり、娘の背に耳を当てているのが目に見える様で、自分も一緒になって耳をそばだてた。寝ている病人が身を翻すたびに起こる寝台のきしみが聞こえるように思われた……。診察が済み、医者が部屋から出て来るらしい……と思ったが、ふと我に返ると医者は出て来なかった。

モプラン氏は再び歩き始めたが、一つ所にいたたまれなかったのだ。辛抱しきれない苛立ちが彼を捉えた。ひどく時の過ぎるのが遅く感ぜられたが、すぐに、これは良い兆しだ、名医は無駄な努力をするのを潔しとしないものであり、すべき事がないならもう既に戻って来ているはず、と思い至った。すると今度は、ふっと彼の中に希望が湧き、娘は助かり、医者が帰る際、その顔の表情に自分は娘が助かったのを理解する……と云うことを思い描いた。モプラン氏はドアを眺めたが、誰も出て来はしなかった。そのとき、恐らくあの子は難しい状態なのだという場合の心の準備が必要だと感じ、いや動悸を持病にして生きている人など沢山いるではないか、とも考えた。そして「死」という言葉、その恐ろしい言葉がそれら全ての想念の中心で彼を呪縛した。彼はその語を、自分の中で恢復期、治癒、健康という同じ概念を何度も反芻することで放逐した。記憶を探って、自分が知る限りの病気に罹って死ななかった者たちの姿を思い出した。だが、そんなことはともかく、医者は自分に何を言っ

てくるだろうか？……彼はただその疑問を繰り返し自問し続けたのだった。モプラン氏には、この往診は何時まで経っても終りがなく、それはこの先も永遠にないものの様に感じられた。そしてまた時折、ドアが開くのを思っては打ち震えた。結果を知ることなく、この儘ずっとこうしていたい様な気持ちにもなってくるのだった……が、終いには希望が再び彼の全身を捉えた。

ドアが開いた。

「どうでしたか？」モプラン氏は閾際に立った医師に向って訊ねた。

「ご主人、がっかりなさらないでくださいな」医者が答えた。

モプラン氏は見上げて医師を見詰め、唇を動かしたが、一言も喋る事が出来ず、口の中は唾一滴出ない程までに渇いていた。

医者は彼に長々と彼の娘の病気、その重さ、危惧すべき合併症について説明し、それから長い処方箋を書き、一つ一つの項目でいちいち、「お分かりですか？」と確認してくるので、「確かに」とモプラン氏は呆然とした様子で反応していた。

「ああ！　わが子よ、どうやら上手く行きそうだ！」

こんなことを口走りながらモプラン氏は娘の部屋に戻った。

「ほんと？」彼女が答えた。

「パパにキスして……」

「お医者さん、何て言ってたの？」

「ほら、この顔をごらん！」そう言ってモプラン氏は微笑んでみせた。が、彼は死ぬほど辛かったのであった。

「あ！　そうだ」彼は振り返って帽子を探すような仕草をしつつ言った。「パパはこれからパリに行かなくては

ならない、おまえの薬を調合して貰わなくてはならないからね」

四十四

鉄道の駅で、モプラン氏は医者がある車輛に乗り込むのを見かけた。彼は別の車輛に乗り込んだ。もはや彼は医者に話しかけて向かい合うだけの余力を残してはいなかった……

パリに到着すると、モプラン氏は薬局に入った。薬の調合には三時間かかる旨を告げられた。「三時間も！」そう反応してしまった。だがそんなに長くかかるというのが今の彼には却って幸福に感じられた、帰宅するまで、まだ時間があるということが。

ひとたび街路に出ると、モプラン氏は歩き出した。筋を追って考えることは無かったが、頭の中に、神経痛の心臓の鼓動に似た、鈍く持続するある種の打撃音を感じていた。感覚は、ひどく仰天したときのように鈍っていた。人々の足の歩きゆく様、馬車の車輪の回転、それだけが視野に入ってきた。頭は重たく、と同時に空っぽに感じられた。人々が歩きゆくのを見ながら、歩いた。通行人たちに連れまわされ、群集のうねりの中に投げ出された。モプラン氏にとって、街路は光と物音とからなる一編の夢以外の何物でもなかった。巡査の白いズボンが、一瞬視界をよぎる事がなかったら、日が照り注いでいるのも認識しなかったろう。

右へ行こうが左へ行こうが、彼にとってはどちらでも良かった。何もしたいと思わず、また何もする勇気も無かった。自分の横で、人々が移動して、押し合いへし合いし、早く歩き、何かに向ってゆく様子に驚かされていた。人生の目的や関心、それらは数時間前から、モプラン氏にはもはや存在していなかった。世界が終ってしまったみたいに感じられていた。彼は、パリの賑わいが素通りしていってしまう死者の様であった。彼は自分に

起り得るすべての現象の中に感情を掻き立ててくれそうなもの、いやただ単に感情に訴えて来そうなものを探してみたが、彼の陥っている絶望の底にまで届きそうなものは何ひとつ無かった。

時折、彼は誰かに娘の消息を訊ねられて、それに返事をするかの様に声高に、「ああ！　そうなんですよ、大変な病気になりまして！」と言ったかと思うと、今度はその返事を聞いた側の人のような仕草をするのだった。しばしば、彼の前をショールを羽織っていない、丸々とした体格の女子工員、民衆の健康そのものの様な美しく陽気な若い娘が歩いてくるが、そんなときには彼女を見ないために道を反対側へ渡ってしまうのだった。一瞬彼は、通り過ぎ行く全ての人々に対する激しい怒りに捕われた、無駄に生きながらえ、我が娘の様に愛されているわけでもなく、生きている必要もない！　と彼には思われた全ての人々に対する怒りに！

モプラン氏は公園で坐っていた。ひとりの子供がやって来て、ひと掬いの砂を菓子だと言ってフロックコートの裾の上に置いたが、他の大胆な子たちは雀の様にずうずうしく近寄ってきた。それから、徐々に呆気に取られ、シャベルを手落としたり、戯れるのをやめたりして、子供らは恐る恐る、そっと、子供らしい視線でこの非常に悲しげな大人をしげしげと見始めた……モプラン氏は立ち上がって、公園から出て行った。

彼は舌が回らず、咽喉が渇いていた為、カフェに入った。

彼の向かいには、麦藁帽子を被り、白い袖無し胴着（カンズー）を着た幼女がいた。その子の小さな足、ぎざぎざになったズボンの裾と小さな靴下の間の硬そうな可愛いふくらはぎの筋肉が見えていた。幼女は父親の上で動き、乗り掛かり、這い登り、飛び掛かるのに専念していた。また父の膝の上で直立して足踏みした。幼女の首に掛かっていた小さな十字架が首の桃色の肌の上で飛び跳ねた。父親は絶えず娘に、「ほら、もう止めなさい！……」と言っていた。

モプラン氏は目を瞑ると、六歳の頃の我が娘（こ）の姿が眼前に彷彿とした！　で、彼はイリュストラシオン紙を一

部手元に引き寄せ、上から覆い被さるようにして挿絵に見入るよう努めたが、その最期のページの判じ絵に目が留まった。

モプラン氏は頭を再び上げると、ハンカチで額を拭った。判じ絵の答えの言葉を、「死に対しては、上訴できない」と彼は読み取ったのである。

四十五

そのころ、モプラン氏には、もはや希望が持てず、時が来るのを待つばかりの人間の辛い生活、不安と怯えの日常が始まったのであり、その絶望的で、身震いする事が多く、いつも死の到来に聞き耳を立てている日々に於いては、家の中の音や、また逆に沈黙や、隣室の物音や、沸き起こったり近付いて来たりする声を恐れてしまう。外から帰って来る際には、閉じた戸を目にするのが怖くなり、開けて呉れた者に視線でまだ生きているかを訊ねたときの相手の表情が恐ろしくなるのだ。

病人の傍に付いている者の御多分に洩れず、彼は苦々しい思いの中で、自己批判を強めて行った。自らを責め苛み、自分には過ちがあった、やってあげて然るべき事を何一つしてあげられなかった、もしもっと早く医者に相談していたなら、あの時期、あの月、あの日に、あのことに考えが及んでいたなら、この子は恐らく助かっただろう、と云ったことを思いながら悲しみを深めた。

夜には、寝台の温かみが彼の苦悩を高ぶらせた。孤独、闇、沈黙からは、彼にはたった一つの考え、たった一つの像しか立ち上らなかったが、それは彼の娘であり、そして何時もそうであった！　想像力は心配で動揺し、恐れは極みに達し、その結果、不眠が重なり、終いには、恐ろしい妄想で、胸を刺す様な激しい興奮を覚えるに

至った。朝には、だらしない目覚めを迎えるが、そのときは、夢と現の境にいる者が本能的に寝返りを打って日の光を避けるように、彼は眠気の奥深くへ入り込み、朝一番に考えてしまう事を押し退け、なおそれを思い出さないように努めて、なるべく自分の現在の意識全体から逃避しようとした。

それから一日が再び、何時もの心労と共に始まるので、父は自制し、克己し、陽気に振舞い、病気に苦しむ者がふと見せるあの微笑みに、あの悲しい陽気さに、あの未来にぶら下がる儚い幻影に、死にゆく者が自らを欺き、周囲の者に希望を求めるあの痛切な言葉に、対応しなければならないのだった。娘は父親に向って、例のか弱い、ひどく優しく消え入るような病人特有の声で言った。「苦しくないってことは、大丈夫なんでしょ！……完全に良くなったら、あたし、思う存分、楽しく過ごすわ……」

そう言われて父は、娘に向って、「そうだね」と涙をこらえながら答えた。

（つづく）

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 220–230.